

随 想

マーラー五番の顛末

柳川 繁雄

学生の頃、暇がありすぎて金がなかったので、楽器の練習でも始めようと思った。そういう状況の人間にとって、金はかからず、やってもそう腹も減らず、つまり楽器の練習ほど好都合なものはない。それでチェロを始めて、アマチュアオーケストラに入れてもらって現在にいたっている。

昨年の冬の定期公演がグスタフ・マーラーの第五交響曲と決まった時、わたしは嬉しかったけれども、今度こそ以前の失敗をくり返すまいと決心した。まず嬉しい理由は、なんと言ったってアマチュアオケにとっては夢のような身分不相応な大曲だ。ためしに病院の同僚でクラシック気違いの某氏に、「今度マーラーの五番をやるんでね」、などとさりげなく漏らすと彼はにわかには羨望と嫉妬のまなざしでわたしを見た。その快感たるや脳天がしびれるほどだ。一方反省するのは10年前にマーラーの第一番をやった時のことで、これがとんでもない大曲で弾けどもひけども終らない、もう途中でくたびれ果てへたり込んでしまったのだ。あれは本当に見通しが甘かった、不甲斐なかった。指揮者に対しても申し訳なかった。だから今度こそ、わたしらは鉄人28号のような強靱な体力をつけるところから始めねばなるまい。そこで早速仲間たちと2時間食べ放題の焼肉屋へ出かけたのだった。

それで楽譜が配られまずやることはこの大曲の分析、解釈だ。理論武装だ。この曲の中心をなすのは第三楽章であり、これをピラミッドの頂点としてあちらがこうなってこちらが云々……以下省略。これで勉強は充分。さあ、あとは実践あるのみ。

ところが練習が始まると、オーケストラのあちこちでこの曲のことを平然と「マラゴ、マラゴ（すなわちマーラー第五番の謂いなるか）」と呼ぶ者が現れるようになった。オケマンはドボルザークのチェロ協奏曲のことを「ドボコン」

などと呼ぶことがあり、これだって相当なものだが、しかし世の中には表現の自由の問題とは別に言ってよいことと悪いことの区別くらいはあるべきだ。私の横で弾いている某嬢などはあどけない顔をして私に向かってこの言葉を13回くらい吐いた。そのたびにわたしは目の前に腸詰が5本ぶら下がっているのを連想せざるを得ず、かなり情けない思いを禁じえなかった。しかし神よ彼らを許し給え、彼らはただ無邪気なだけでおそらく罪はないのです。ただ時はめぐり時代は廻ったのだけなのです。と、わたしはわが国民の言語的感性の変遷を目の当たりにしてうたた感慨にふけたのである。

さて練習がすすむにつれ、あらためてこれは名曲ではあるが大曲であると思ひ知る。死に対する恐怖と憧憬。人生への賛歌。肉体を持った人間のまったく赤裸々な叫び。それらが響きとなって、銜いも作為もなく語りかける。そしてその曲たるや、長さも長し、てんめんたる情緒への耽溺と阿鼻叫喚を行きつ戻りつ、弾けどもひけども終らない。この作曲家はフロイトに精神分析を受けたほどの強迫神経症の持ち主で、しかしまた、とび抜けて自己顕示欲の強い人で、したがって謙譲の美德に欠け、何でも思いついた曲想は世俗も高貴も、躁も鬱も、ありったけぶちまけて陳列しないと気がすまないのだ。マーラーが生きていた百年前のウィーン市民は今のわれわれよりも暇があったというのは歴史的事実ではあるが、現代に生きるわたしらはみなそれなりに忙しくそれぞれ家庭の事情だってあるので、言いたいことはもう少し要領よくまとめて表現するのが社会的マナーというものであろう。サマセット・モームはかつて「人間の絆」という名作にして大作をものしたが、その作品が世に膾炙されるや、長編を読み通す根気を持たぬ読者のためにばっさりとしてこれを短くしたダイジェスト版を出版して平然としていたという。これこそ大人の態度というべきではないか。それからこの曲には演奏上の難所も限りなくある。わたしの腕にはあまる難所にさしかかるたびに、途方にくれて考えた。どうすべきか。①オケをやめてアウトドアのレジャー派に転向する。②死んでもっと音楽的才能に恵まれた人に生まれ変わる。③辛抱して練習する…。そうなのだ、しょせんオケマンは作曲家あつての存在なのだ。しかも何たってこれは名曲なんだから文句は言うまい。練習れんしゅう……。

と言うわけで、演奏会の本番は無我夢中で、長かった練習の日々の苦労を回顧する暇もあらばこそ、あつという間に過ぎた。体力のペース配分には留意し

て、こんどは途中でへたり込むこともなかった。これで終わったのだという実感をかみしめながら帰宅し、一人でビールを飲んだ。そして、結局この曲の演奏者たり得た喜びもさることながら、長い間この曲の特等席での鑑賞者たり得た幸せが一番だったのだと考えた。

演奏会は終わった。宴はすんだ。わたしらは本当によく頑張った。しかし終わって半年の間、わたしは本番の録音テープを聴く気がしなかった。あれはもうすんだ夢よ。もしへたに聴いてみい、もしそれが幻滅の出来であったなら、この間のわたしらの努力と生活は一体何だったのだということになるではないか。辛気臭いオーケストラなんかやらずとも、魚釣りやゴルフでもやった方がましな人生だったということになるではないか（どちらもまだやったことはないけれども）。けれども最近のある日、わたしは意を決してこれを聴いてみた。出来は悪くない、ちゃんとマーラーの音がしているではないか。その瞬間、わずかの暇を見つけては練習に励んだ過ぎ去った日々は放射能を発して鮮やかによみがえったのである。わたしはほんとにマーラーとともにあの幸せな日々を生きたのだ。拙いわたしらをマーラーの世界に導いてくださった指揮者の先生には感謝の言葉もない。

最後にわたしの家族のことも書いておかねばなるまい。女房と娘はこの演奏会が終わってくれて心底ほっとしたという。わたしが週末に外出もせず壁に向かって楽器にしがみつき、まるでマーラーのような神経質で不機嫌な顔をして彼らにあたり散らすのがやっとこれですんだ。それから壊れた蓄音機のように一日中何回も同じフレーズばかり弾くので、聴きたくもない曲がすっかり頭にこびりついてしまった。彼らは願わくばもっと時間がたって、マーラーなんかきれいさっぱりと忘れてしまいたいものだとなかしたのである。（注：この頃わたしは単身赴任中でした。）

（名古屋大学医学部助教授・放射線医学講座）